



1

多文化共生のまち・多様な人材が活躍できるまちを みんなde つくる

一般社団法人国際交流協会事務局長 多文化共生マネジャー 大河原佳子氏

最近、街角で外国人の姿を多く目にするようになりました。今回は日々何気なくすれ違っている人達の生活背景を聞くことができました。

在留資格では大半が永住権、定住権を持つ方だと知り、外国人人口は今後も多くなっていくのだろうと思う中、工業団地があることで、技能実習での在留もありますが、甲賀市の特徴だろうと思ったのは競走馬に関わる仕事の方がいるということでした。

子ども達の生活に対しては日本語の習得だけでなく、コミュニティを作り支え合える体制を整える事も大事なことであるといえるでしょう。家族の生活、買い物や通院に通訳として付き添ったり、家庭内での働き手として3世4世の子ども達が社会に出ています。

日本人の心の中に壁を作っていないか、もう一度考えを改める必要があります。

まずは国際交流の場に入ること、こうした市民交流は、お互いの生活を知る機会として、また街角で困っている時に声をかけ合えるその第一歩として、とても大切なことだと思います。(レポーター：木村有香)



2

ヤングケアラーの支援 繋ぎ方・紡ぎ方・創り方

滋賀県子ども青少年局家庭支援推進室ヤングケアラーコーディネーター 滋賀県教育委員会スクールソーシャルワーカー 上村文子 氏

上村さんはSSWであるご自身の経験から、絵本「こんとあき」のごぎつねこんちゃんのぬいぐるみを空腹やつらい気持ちを抱えている子どもに見立て、代弁していただきました。日本では介護の文脈で語られることの多いヤングケアラーですが、上村さんは私達にこう訴えかけます。

「子どもを権利の主体として見てください。そして結果が平等になるよう、格差の是正にこそ、みんなで取り組んでいかなければなりません。」私達はつつい支援に即効性や完璧さを求めて、取り組む前のハードルを上げがちです。「たとえ短くても子どもが子どもらしく過ごせる時間を保障することが大切です。そしてそれが積み重なれば子ども達の大きな力になります。居場所機能は、時間をかけてじんわりと効いてくる漢方薬のようなものです。」

上村さんのメッセージに、「子どもたちのために自分にもまだまだ出来ることがある」という思いを強くした貴重な時間でした。

(レポーター：引田幸男)



橋本代表挨拶

感想

地域の現状や取り組みがよくわかりました。無関心が一番よくないことだと思います。意識して語り、できることを惜しまずしていきたいと思いました。

感想

毎回、楽しみに参加させていただいています。皆さんの頑張りを身近に感じることで、自分の活力に繋げられる場になっており、今回は少し遅れてはありましたが、懐かしい方もお出会えでき、よかったです。今年度からメジャーデビューということで、嬉しい限りです。ただ、頑張りすぎて、息切れるよりは、息の長い活動となることを願っています。

感想

いよいよ動き出した地域共生。助けが必要な方の最善の策を早急に出していくべきと感じます。



感

初めて参加させていただきました。知り合いに会い、同じ道に進んでいることがわかり、e-こうかのおかげです。こんなに多くの関係者や興味ある方がいる、それがわかっただけでも福祉の仕事も捨てたもんじゃない(笑) まだまだやりたいことはたくさんありますが、そのヒントになりそうなe-こうかだと感じました。これからも期待しています。

4人のカフェマスターレポート&参加者の声

カフェマスターと参加者の対話形式のイノベーションサロン、合間の時間も会話弾み新たな発見が生まれず、一部を紹介します。

感想

甲賀で分野や所属にとらわれず、集い学び、出会う場をありがとうございます。みなさんのパワーを感じ、エネルギーをいただくことができました。またぜひ続けてください。

感想

参加するだけでつながれるような気がします。参加してよかった。

3

不登校児への訪問看護・リハビリテーションについて

～活動の中でわかってきたこと～
サーデイズ訪問看護・リハビリテーション 岩倉浩司 氏

不登校児への訪問看護リハビリテーションの関わりについては「僕たちは学校に行ってもらうことをゴールにしていない!」という思いを前提に、医療従事者として、まず自分たちにできることは何かを理解することが大切であり、不登校によって起こる健康課題を解決することが自分達の役割だと話されていました。

不登校による昼夜逆転の生活や体力の低下など、子どもたちが抱える一つ一つの身体的・健康的課題に対し

「親でもない、先生でもない、そんな大人たちが、あそび(リハビリ)を通して、できる!という成功体験と一緒に積み重ねることで、笑顔と自らの気持ちを引き出すきっかけに繋がるんです!」と嬉しそうに話されていたのが印象に残っています。

ブースの参加者からは「どうしたら利用できるの?」

「身体は元気だけど、不登校の場合は対象になるの?」といった質問が挙がり、サービス提供として制度の限界はあるが、サービス対象にならない子どもたちの居場所づくりに関しては、運動を楽しむことができるフリースクールなど、障がいの無いブランディングを、担ってほしいと答えられていました。(レポーター：山口路子)

感想

会場を間違えて焦り、しかも手元にチラシもなく途方に暮れていましたが、facebookで検索してみると、チラシが出てきてくれました。諦めかけていたのですが、行って良かったです。

感想

イノベーションサロンに初めて参加させていただきました。3つのブースでお話を聞いてどれも大変参考になりました。行政のように専門性を持った形で関わりだけでなく様々なつながりの中で日常的に関わりをもつことの大切さがよくわかりました。東近江のSOYORIのような取り組みが甲賀市でも行われ、いろんな人がつながることができるとは素晴らしいことだと思います。

感想

いろんなお話をお聞きできたことはもとより、いろんな方にお出会えできたことが何より嬉しかったです。帰っても興奮が冷まず、この時間にこれだけの人が集まる熱量にワクワクしました。このような場にぜひ、また参加させていただきたいです。



4

成年後見人の活動と実態、これからの希望 独立社会福祉士の立場から

ばあとなお滋賀 甲賀ブロック 島田一子 氏

『社会福祉士として、判断能力が不十分な人の後見活動を行う島田さん。』

後見活動を行う専門職は、弁護士や司法書士など、社会福祉士だけではありません。その中で、社会福祉士の専門性を活かした後見活動とは。後見人の役割として、財産管理と身上監護が挙げられます。財産管理ばかりがクローズアップされがちな後見人ですが、島田さんは身上監護を通した「その人らしい生活の実現」と、関係者の連携を大切にしています。

「いろいろな支援者がいて、それぞれの立ち位置がある。その中で、後見人が一番本人のそばにいる、と考えている。本人の希望は必ずしも合理的ではなくて、そこに寄り添うようにしている」、「本人と対立することもあるけど、長年接している、と段々と気持ちが伝わることもある」と、どこまでも本人の気持ちに寄り添ってられます。

「たとえ合理的でなくとも、本人の気持ちを第一に」「後見人だけで考えず、本人を取り巻く人たちの考えも集めて」、より良い支援を模索する島田さんの姿勢が垣間見えるお話でした。

参加者からは「後見人って、どうやって、どんな仕事をしているの?」「根気のある仕事で大変そうだけど、どんな気持ちで一人ひとりに接して仕事に臨まれているの?」と微に入り細に入る質問が飛び交いました。

(レポーター：山本幹太郎)

